

「広島、長崎への原爆投下」メモ

●広島の運命の日、昭和20年8月6日は朝から快晴 △台風の当たり年 8月だけでも 8個発生

5個が 本土に上陸 または 接近

広島も4日までは 台風8号の影響で 雨模様

△台風が朝鮮半島へ抜けた5日から 天候は回復

異様に寒かった気温も 平年並の暑さに

△午前8時15分は 通勤通学の時間

駅や市電 市バスの停留所には 人々の行列

街頭では 建物強制疎開の取り壊し作業

ワイシャツ姿が多く 袖をまくっている者も

△原爆は まさに この時間に炸裂した

●全くの不意打ちになった

△中国軍管区司令部は 午前7時9分

「豊後水道を敵大型機3機北上中」で 警戒警報

播磨灘方面に去ったため 31分に解除

△8時6分 広島東方80*の防空監視哨が

西に進んでいる 2機のB29を発見

軍管区が 報告を受けたのは11分

空襲警報は 間に合わなかった

△市民は 高空1万㍍のB29を 気にとめなかったし

防空壕に 避難する者も なかった

●8時15分、約9600㍍から投下された原爆は、市中心部の大手町1丁目付近、高度580㍍で爆発

△約1*㍍の ウラニウム235によって

直径100㍍ 表面温度1万度の

巨大な火の球から 閃光 爆風 放射能

△広島は TNT火薬2万㌧のエネルギーに

押し潰され 焼き尽くされた

△各所で火災が 火災嵐を起こし 灼熱地獄に

風速5㍍ほどが 2、3時間後に 40~50㍍

△原爆のチリで出来たキノコ雲が1万5千㍍に上昇

凝縮して 油のような 黒い雨に

△雨に打たれた人たちが 原爆症を発病

広島生まれの作家 井伏鱒二の「黒い雨」に

△市内の 300人ほどの医師は 60人が即死

医療活動に当たったのは 30人ほどだった

なぜか空襲されなかった広島

広島は、西日本を統括する陸軍の第2総軍司令部をはじめ、第5師団、中国軍管区司令部のある軍都。日清、日露戦争以来、外征軍は宇品港(神戸)から出ていった。それなのに3月、4月に少數機の空襲があつただけで死傷者も10数人。軍港のある呉市は6、7月の空襲で壊滅していた。33万6千の広島市民は、なぜ広島が爆撃されないのか、不思議に思っていたし、反面、いつやられるのかという思いの毎日を送っていたという。

井伏 鱒二(いぶせ・ますじ)

明治31(1898)~平成5(1993) 広島県生まれ。作家。本名満寿二。昭和13年「ジョン万次郎漂流記」で直木賞。戦後の代表作に「本日休診」(講文館)、「漂民宇三郎」(芸術院賞)、「黒い雨」。41年文化勲章受章

「カメラマンの証言」から

中国新聞写真部の松重美人(まつしげ・よしと)は爆心地から2.7*㍍ほど南東の自宅で被爆した。社へ行こうとしたが、市役所一帯は火の海。巨大な火炎はうなりを立て、竜巻となって前へ進めない。死臭の漂う静けさ、それを切り裂く怒号と絶叫、人々と横たわる死体、人々が幽鬼のようにさまよっていたという。御幸橋に引き返すと、猛火を逃れてきた負傷者が群れをなしていた。派出所前で2人の警察官が食用油を塗って応急手当てをしている。路上から橋の上は、断末魔の負傷者でびっしり。「ここで撮ろう」と、首にかけたカメラに手をかけたが、地獄のような光景に指が動かない。やっとの思いでシャッターを切り、

●広島の人にとっては「スペテアッタコトカ」

原民喜は原爆体験を「夏の花」に(昭和22年)

ギラギラノ破片ヤ
灰白色ノ燃エガラガ
ヒロビロトシタ パノラマノヨウニ
アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノキミ
ヨウナリズム
スペテアッタコトカ アリエタコトカ

△爆心から 1.2キロの死亡率は ほぼ50%

それより近い地域は 80~100%の即死

●いつまでも尾を引く原爆症

△第2総軍参謀 朝鮮王族の李鍾公(りくこう)中佐は

馬で出勤中に被爆 ほとんど外傷もなく

意識もハッキリしていたが 翌日未明に急逝

△お付武官 吉成弘中佐が 追い腹を切り殉死

大丈夫と思っていると 突然 亡くなる人が続出
被爆者をむしばむ目に見えない放射線

NHKは平成18年4月16日、20年前の1986年4月26日に起きたソ連 Chernobyl 原発事故で、未だに悲惨な後遺症を引きずっていることを特集した。事故処理に当たって被爆した人たちが暮らすウクライナのアパートで、50歳を前に、ガン、心臓病で死ぬ人が後を絶たない。先天的異常を持って生まれる子供も増加し、20年の歳月を経てもなお、事故が現在形のまま進行している事実を突き付けていた。

原爆死没者は45年間に3倍近くに

[終戦直後の調査]

△広島市(20年11月広島県警察部調べ 人口336,483人)

死者 78,150 行方不明 13,983

重傷 9,428 軽傷 27,997

△長崎市(20年11月騎縄調べ 人口270,113人)

死者 23,753 行方不明 1,927

重軽傷 40,993

[平成2年厚生省発表の死没者(5月15日)]

広島市 201,990 長崎市 93,966

10歩ほど近付いて2枚目を撮ったが、「頬に涙が流れ、ファインダーの画面がうるんでいたのが今も私の脳裏から消えない」と書いている。

原 民喜(はら・たみき)

明治38(1905)～昭和26(1951)広島県生まれ。小説家・詩人。昭和22年、原爆体験を小説「夏の花」に。26年、朝鮮戦争勃発に衝撃を受け鉄道自殺をした

…手記「原爆ゆるすまじ」から ……

三菱長崎造船所勤務の山口彊(やまち・きょう)は広島出張中だった。かすかにかなりの高度と思われる敵機のエンジンの音を聞いたかと思うと、中空にマグネシュームの巨大な塊が発する瞬間の閃光と熱線を感じて、思わず大地に身を伏せた。しばらく気を失っていたが、恐る恐る空を見ると、巨大なキノコ状の雲がむくむく盛り上がり、拡がり、沸き返っては赤、黄、青、紫、黒など、パレットの上の絵具をそのままナイフでまぜ合わせたような、不思議な色彩の乱舞が繰り広げられた。「恐怖とも感動ともつかない恍惚境の中で、私は天国とも地獄とも思える壮大な神秘の世界にわれを忘れていた」と書いている。

その時、急にまくりあげたワイシャツの左肘先から手先が、真っ赤なゆで上げのタコのようになっているのに気が付いた。同時に、針で刺すような耐えがたい痛みと、悪寒を感じた。喉はからカラカラで、その喉から頭部の生え際に手をやって、初めて頭髪の半分が燃えてボロボロ落ちてくるのを知った。避難してくる群れに出会ったが、大人も子供もただ黙りこくって、無表情に黙々とうなだれたまま無意識に足を運んでいるよう

●新劇俳優丸山定夫も犠牲に

▽移動演劇隊「さくら隊」を率いて 広島入り

7月の山陰公演から戻り 四国に移動する矢先

▽堀川町の宿舎は 爆心から500㍍

熱線も 放射能も 爆風も 致命的だった

宿舎に待機の 女優園井恵子など 9人が死亡

「また芝居がやれる」といっていた丸山

演出家の八田元夫は、応召した男優の穴埋め探しに上京していたが、広島がやられたと聞いて、列車を乗り継いで9日に広島に戻ってきた。広島・呉中間の国民学校が臨時野戦病院になっていて、丸山が収容されていることがわかり12日に訪ねると、パンツ1枚で寝かされていた丸山は、「来てくれたか、来てくれたか」泣き出したという。

熱も高く十分な治療薬もない。別の劇団の仲間のいる宮島のお寺に移したが、15日の終戦の終戦の玉音放送を聞いて、八田に「また芝居がやれる時期になったんだねえ。俺、こんな体になっちゃったけれど、あと2年したら良い芝居をやるよ」と、本当に嬉しそうに話していたという。翌日の16日、八田が他の隊員の消息を探しに広島へ戻り、夜最後の汽船で帰ると、丸山は冷たくなっていた。頭の毛が抜けかけ、原爆症の初期症状が出ていた。

●「本日、広島は敵の高性能特殊爆弾と思われるものによって攻撃を受け、大被害を受けた」

▽大本営へ 第一報

第2総軍作戦主任参謀 橋本正勝中佐(駿府守護將)
通信は完全に途絶

宇品の船舶司令部 呉鎮守府に 伝令を出す

▽呉の電報が 東京に入ってきたのは 6日午後遅く

▽大本営は 原爆と推測し

有末精三中将(參謀本部第2課長)を団長に
8名の調査団の 広島派遣を決定

●トルーマンは全世界に声明、「広島に落としたのは原子爆弾である」

だった。六年生くらいの女の子が、一年くらい子を背負っていて、みんな裸だった。髪の半分は燃え、背中の子は両眼がただれて塞がっていた。その前をフラフラ行く少女は、幽霊のように両手を胸のあたりで折り曲げていたが、折り曲げた両掌からは肘のところで焼けた表皮が、そのまま手首のところまで垂れ下っていた。山口は7日午後の汽車で長崎へ帰り、9日にまた被爆、「二重被爆」の希有な経験者になる。

丸山 定夫(まるや・さだお)

明治34(1901)～昭和20(1945) 愛媛県生まれ。新劇俳優。大正13年築地小劇場第1回研究生として、小山内薰の指導を受ける。昭和4年新築地劇団、17年苦楽座を結成し、移動演劇隊「さくら隊」を率いて広島巡演中に原爆にあい死亡

小山内 薫(おさかい・かおる)

明治14(1881)～昭和3(1928) 広島県生まれ。演出家、劇作家。明治42年「自由劇場」を興し演劇改革の旗印を掲げる。モスクワ芸術座で演出法を学び大正13年築地小劇場を創立、日本新劇界の先駆者の存在となる。著に「小山内薰全集」

八田 元夫(はった・もとお)

明治36(1903)～昭和51(1976) 東京生まれ。演出家。昭和6年新築地劇団に入る。戦後は新協劇団を再建、劇団東演主宰

有末 精三(ありすえ・せいぞう)

明治28(1895)～平成4(1992) 北海道生まれ。陸軍中将。駐伊武官、軍務課長、昭和17年8月參謀本部第2部長。20年8月終戦で対連合軍陸軍連絡委員長、21年7月から31年12月まで駐留米軍顧問

- ▽内閣書記官長 迫水久常は 7日午前3時頃
同盟通信海外局長 長谷川才次からの電話で
「その破壊力はTNT火薬二万トンに相当する。我々は現在日本が有するいかなる都市、いかなる生産施設も、一層迅速かつ速やかに完全に抹殺する用意がある」
- ▽米・英・中三国は 7月26日夜
対日最後通告として ポツダム宣言を発表
「右以外の日本国の選択は迅速且完全なる破壊あるのみ」
- ▽鈴木貫太郎首相は 28日の記者会見で
「ただ黙殺するだけである。我々は戦争完遂に邁進するのみである」
- ▽日本が 宣言を受諾しないなら
「さらに原爆攻撃を続けるぞ」と 脅し

- 調査団には、日本の原子力研究の第一人者・理化学研究所主任研究員の仁科芳雄博士
- ▽仁科は 同盟記者から トルーマン声明を聞いて
「TNT二万トンの数字は二、三年前算出した計算と一致していたので、本当かも知れない」
- ▽7日は 飛行機がエンジン不調で 引き返し
調査団が 広島入りをしたのは 8日夕方
- 6日の第一報の段階で「原爆」と直感した情報局次長の久富達夫
- ▽総裁秘書官 川本信正(元読売新聞記者)に
「あれは原子爆弾だよ、間違いない」
- ▽川本に 右手のこぶしを握って パッと広げ
「物質の一番核になるところが原子だ。それがある力でパッと離れると、その時ものすごいエネルギーが出るんだ」
- ▽国務相兼情報局総裁 下村宏の部屋に
やはり 和平派の国務相 左近司政三が来ていて
下村は 卷紙をとって 筆でサラサラと書き
左近司に「これでいいね」
- ▽左近司が うなずくと 卷紙を 川本に突き出し
「君、これを総理に届けてくれ」
- ▽達筆な 躍るような大きな字で 9文字
「右か左か、御決断の秋(とき)」

迫水 久常(さこみづ・ひさつね)
明治35(1902)～昭和52(1977)鹿児島市生まれ。岡田啓介元首相の女婿。首相秘書官、大蔵省銀行局長を経て昭和20年4月鈴木内閣書記官長。戦後衆院、参院議員となり池田内閣経企庁長官、郵政相。著に「機関銃下の首相官邸」

長谷川 才次(はせがわ・さいじ)
明治36(1903)～昭和53(1978)青森市生まれ。ジャーナリスト、外交評論家。同盟通信ロンドン支局長、報道局長、海外局長を歴任。戦後時事通信社を創立

鈴木 貫太郎(すずき・ぬたろう)
慶応3(1867)～昭和23(1948)大阪・久世生まれ。海軍大将。連合艦隊司令長官、軍令部長歴任。昭和4年侍従長となり、二・二六事件で瀕死の重傷を負う。19年枢密院議長。20年4月首相に就任し終戦に尽力した。著に「鈴木貫太郎自伝」

仁科 芳雄(にしな・よしお)
明治23(1890)～昭和26(1951)岡山県生まれ。物理学者。大正10年理研に入り渡欧してニールス・ボーアなどに師事。原子核・宇宙線・量子力学の研究を進め昭和12年に日本初のサイクロトロンを完成させた。戦時中、理研で極秘の原爆開発計画を指導。戦後理研所長、科学研究所社長。21年文化勲章受章

久富 達夫(ひさとみ・たつお)
明治31(1898)～昭和43(1968)東京生まれ。東京日日新聞(廃刊)記者、政治部長、編集総務。昭和15年第2次近衛内閣で情報局が新設されると初代次長。日本放送協会専務理事を経て20年4月、再び情報局次長となり終戦の玉音放送に尽力

●内閣に局部長級を集め「原子爆弾対策委員会」

▽委員長に 総合計画局長官 池田純久陸軍中将

7日午前 第一回会議が開かれ 久富が出席

▽情報局 外務省は

「アメリカは大統領声明など、活発な宣伝戦を開いている。伝單など空から宣伝ビラもばらまくだらうし、国民もいろんな噂を耳にするに違いない。惨状をはっきり国民に知らせ、原爆に対する認識を十分に持たせて、国民に本当の意味での覚悟を持たせることが必要だ」

▽陸軍省 内務省は 反対

「防衛策も指示することなしに、原爆出現を報道するのは、国民に非常な衝撃を与え戦意を失わせるから不利だ。目下調査中だから、少なくとも原爆だということの発表は差し控えたい」

▽技術院も「いかにアメリカの技術が進んでいても将来は知らず、現在はそこまで進歩していない」

▽池田が「原爆でなければ何か」と 反問すると「何か特殊な装置をした新型爆弾であろう」

▽委員会の結論は

「原爆の字句を用いず、新型爆弾の表現で発表」

●午後の閣議で、アメリカに抗議することに

▽東郷茂徳外相は「かかる残虐な兵器を用いることは、毒ガスの使用を禁じている国際公法の精神に反する不当行為である。イスラエル館、万国赤十字社を通し、速やかに原爆停止すべき旨を厳重抗議したい」

▽鈴木首相も「強く強く抗議して下さい」

▽日本政府の抗議文は 10未明 スイス経由でアメリカに「本件爆弾は残虐性において、人類文化に対する新たな罪状なり」

▽一、二の閣僚から「ボツダム宣言を受諾すべきだ」

阿南惟幾陸相は 強く 反駁

「原爆と決めてかかるのは早計だ。あるいは敵の謀略であるかも知れぬ。この際は確実に実地を調査して方針を定めるべきだ」

調査団の結果を見て 判断することに

▽参謀本部作戦課戦力班長 高山信武中佐(職後自衛隊陸將)

の話では 陸軍中堅クラスは いきり立っていた

下村 宏(しもむら・ひろし)

明治8(1875)～昭和32(1957) 和歌山県生まれ。号は海南。大正10年台湾総督府総務長官から朝日新聞に入り、昭和5年副社長。二・二六事件直後の広田内閣で閣僚候補に挙げられたが、陸軍が反対。日本放送協会会長を経て20年鈴木内閣国務相兼情報局総裁。終戦に尽力し、戦後は体協再建、国立競技場建設、オリンピック招致に努める。著に「終戦秘史」

左近司 政三(さこんじ・せいぞう)

明治16(1879)～昭和44(1969) 山形県生まれ。海軍中将。海軍次官、第3次近衛内閣商工相を経て鈴木内閣国務相

池田 純久(いけだ・すみひさ)

明治27(1894)～昭和43(1968) 大分県生まれ。陸軍中将。企画院調査官、関東軍参謀副長、昭和20年8月総合計画局長官

東郷 茂徳(とうごう・しげのり)

明治15(1882)～昭和25(1950) 鹿児島県生まれ。駐独・駐ソ大使を経て昭和16年開戦時の東条内閣外相。20年4月再び鈴木内閣外相に就任、終戦に尽力。東京裁判で禁固20年の刑を受け、拘禁中病死。著に「時代的一面 大戦外交の手記」

阿南 惟幾(あなん・これか)

明治20(1887)～昭和20(1945) 東京生まれ。陸軍大将。昭和4年侍従武官、陸軍次官、第2方面軍司令官、航空総監を歴任。20年4月鈴木内閣陸相。敗戦の夜自決

大本営発表(7日午後3時)

一、昨八月六日広島市は敵B29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり
二、敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細目下調査中なり

▽作戦課長 天野正一少将も

「原爆には対策の方法ありとの結論で、軍の内部では原爆を大問題にした覚えはない。必勝の信念に何ら影響はないという考えだった」

▽政府が 不確実な情報で 動けば

軍部のクーデターを 誘発する恐れはあった

● 8日付朝日朝刊は4段トップで「広島へ敵新型爆弾」

▽「原爆ではないか」という噂は あちこちで

… 仁科研究室研究員武谷三男の話 …

治安維持法違反容疑で警視庁に捕まり、喘息が激しくなって釈放され、自宅で監視つきの生活を送っていた。8日の取り調べで検事が新聞を取り出し「お前が研究していたのは、この爆弾のことか」、「そうだ」と答えると、「検事をみんな集めるから、その話をしてくれ」。

ウラン爆弾の解説をしながら「アメリカはまだ数発は持っているかも知れん。ボヤボヤしているとまた落ちてくる」。検事は真剣な顔になつて「もういいから、仁科研究室へ帰つて研究を続けてくれ」。武谷は「これには笑ってしまった」と話しているが、広島がどんなにひどいことになっているか、暗然たる思いだった。

● 宮中、天皇は、広島原爆をどう受けとめたのか

▽内大臣 木戸幸一は

6月に 石渡莊太郎が宮内大臣になってから

侍従武官長 蓮沼蕃(謹太郎)

侍従長 藤田尚徳(海軍大將)と 4人で毎週会食

「木戸幸一日記」(8月7日)

「正午、例の通り宮相室にて会食、広島市に対して原子爆弾を米国は使用、被害甚大、死傷十三万余との報告を受く。一時半より二時五分まで、御文庫にて拝謁、時局収拾につき御宸念あり。種々御下問ありたり — 」

▽木戸は「いくら軍人が本土決戦だと力んだってもうダメだ。こうなれば出来るだけ早く、戦争を終結しなければならない。むしろ一刻も早くだ」

「高見順日記」(8月7日)

「…原子爆弾が遂に出現したというのだ。— 衝撃は強烈だった。私はフーンと言ったきり、口がきけなかった」

高見 順(たかみ・じゅん)

明治40(1907)～昭和40(1965)福井県生まれ。作家。戦争中陸軍報道班員としてビルマ、中国を転戦。戦中から死に至るまでの「高見順日記」を残す。著に「故旧忘れ得べき」「いやな感じ」。日本近代文学館創設に尽力、死後、文化功労者追贈

「夢声戦争日記」(8月6日)

「本日午前八時B29三機広島二来り、恐ルベキ新型爆弾ヲ投下ス。落下傘二ツケタル、原子爆弾ノ如キモノ。死者十五万トモ二十万トモ言ウ。戦争ノ局面コレニヨリテ一転ス」

徳川 夢声(とくのぶ・ゆせい)

明治27(1894)～昭和46(1971)島根県生まれ。映画弁士、漫談家。本名福原駿雄。昭和14年ラジオで「宮本武蔵」を朗読し話芸は天下一品。戦後は週刊朝日「問答有用」などで活躍。著に「夢声戦争日記」

武谷 三男(たけに・みつお)

明治44(1911)～平成12(2000)福岡県生まれ。理論物理学者。昭和13年理研仁科研究室に入り、戦後28年に立大教授。原子力の平和利用や平和擁護に活躍した

木戸 幸一(きど・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。木戸孝允の孫。侯爵。昭和5年内大臣秘書官長、15年内大臣となり、開戦直前東条英機を首相に奏請。末期は倒閣、和平工作に尽力。A級戦犯で終身禁固刑、30年仮出所。著に「木戸幸一日記」

▽木戸は 拝謁して

「原爆で日本国民がメチャクチャにされてから、戦争をやめたのでは手遅れになります。至急に事を運ばなければなりません」

▽天皇も 蓮沼から 報告を受け

深い悲しみに沈まっていたという
「かくなる上は止むを得ぬ。余の一身はどうなろうとも一日も速やかに戦争を終結して、この惨劇を繰り返さないようにしなければならぬ」

▽木戸は「陛下や私があの原子爆弾によって得た感じは、待ちに待った終戦断行の好機を、ここに与えられた感じだった」

▽東郷外相が 8日

「いよいよこれを転機として、戦争終結に決すること然るべき旨」上奏すると

天皇も「その通りである」

「このような武器が使われるようになっては、もうこれ以上、戦争を続けることは出来ない。有利な条件を得ようとして、時期を逸してはならぬ。なるべく速やかに戦争を終結するよう努力せよ。のこと内大臣、鈴木首相にも伝えよ」

▽鈴木首相も 時期が到来したと 判断し

9日に 最高戦争指導会議 閣議を開くことに

●広島調査団は8日夕、調査報告第一電

- 一、これは特殊爆弾である
- 二、とりあえず「白衣の着衣」を徹底されたい
- 三、詳細は今後の仁科博士の調査に待つ

▽第2総軍からも「防空壕に入っていた者は

ヤケドの程度が軽かった」の 報告

▽内務省は8日 各都道府県に

新型爆弾の防御法を指示「必ず壕内に退避。

ヤケドの恐れあり、壕外では露出部を少なく」

▽広島調査団は10日 仁科博士の判決として

「本爆弾は普通爆薬または焼夷剤を使用せるものに非ず、原子爆弾なりと認む」と 断定

▽その際「対策として」

「消極的対策次の如し」と 6項目を挙げている

石渡 荘太郎(いしかわ・そうたろう)

明治24(1891)～昭和25(1950)東京生まれ。平沼・東条・小磯内閣蔵相を歴任し、昭和20年6月宮内相

蓮沼 蕃(はすま・しげる)

明治16(1883)～昭和29(1954)石川県生まれ。陸軍大将。侍従武官、駐蒙軍司令官を経て昭和14年8月侍従武官長

藤田 尚徳(ふじた・ひさのり)

明治13(1880)～昭和45(1970)東京生まれ。海軍大将。駐英武官、艦政本部長。昭和19年侍従長。著に「侍従長の回想」

……8日夕、広島入りした調査団は……

仁科博士は「広島の上空へ来て旋回したとき、下を見て被害の大きいのに驚いた」。街には人影は稀で死の町の様相を呈しており、「従来の焼夷弾の被害と異なり、焼けた範囲の外側に広く倒壊家屋が存在することは、明らかに普通の爆弾ではないことを示し、これは原爆だ」と確信した。

有末中将も「飛行場にはえている草は全て赤茶けた色に変わり、しかも一方で一斉になびいている。町とおぼしき方角に一本だけ枯れ木になった木が立っているのが、ひどく印象に残っている。青いものは全く見当らなかった」と回想している。

広島調査団の「消極的対策」

1. 警戒警報中といえども敵機の接近を知れば掩蓋を有する屋外防空壕に避難すべし
2. 防空壕に入り得ざる者は遮蔽下に入り、姿勢を低くし、閃光後急遽空地に脱出すべし
3. 露出部少なき服装とし厚着をし出来得る限り白色の下着を使用すべし

●陸軍は、表面はまだまだ強気だった

▽陸相秘書官 林三郎大佐は

「本土決戦論が成り立つかどうか、内心非常に心配したが、不成立論を堂々と強調する者はなかった」

▽陸軍は10日 全軍に対して

「この種爆弾は恐るべきものではなく、我が方に対策がある」と 調査団の「消極的対策」を通報

▽下村情報局総裁は 会合で 軍側が

「あれは原爆ではないとか、原爆であるにしても白いシャツを着ていればいいとか、コンクリートの建物なら大丈夫だ」との 説明を聞いて

「一年中、白ばかりの上着を着ていられるわけのものでもなく、コンクリートの建物だって急造できないじゃないか」と 反論したが…

▽結局 国民には 敗戦まで 防御法の発表ばかり

原爆投下の事実と 惨状は 隠されたままだった

▽しかし 国民の耳 心は もっと敏感だった

▽どの町も 次に狙われるのは 自分の町でないか

東京では 警戒警報が 鳴っただけで

屋外に 全く 人影は見られなくなった

●終戦までは民族の運命がかかった10日間

▽終戦の玉音放送は 8日に決まっていた

▽終戦への段階で 一番重要で 決定的因素は

徹底抗戦に 猛り狂っている 軍部の動き

▽終戦=敗戦 軍部は 強く 抵抗するだろうし

クーデターや暴動が 起これば

内閣が 潰されてしまう 恐れがあった

▽久富情報局次長は1日 下村総裁に

「終戦するには一つの形というものがある。それには、陛下に自らマイクの前に立って放送していただく。それが日本の国という建前からも一番いい方法ではないか」

▽天皇の力以外に それも 天皇の声で直接

言う以外に 軍部を押さえることは 出来ない

▽下村も賛成し「ご放送のことは、

私が直接陛下にお目にかかるてお願いしよう」

▽8日になって 宮内省から

「きょう参内していただきたい」

4. 火傷薬は必ず持参すべし

5. 防空壕には爆風除けを降すべし

6. ガラス窓は負傷の原因となるを以て直ちに撤去し、日本家屋は半地下式の壕舎に改築すべし

林 三郎(はやし・さぶろう)

明治37(1904)～平成10(1998)京都府生まれ。陸軍大佐。参謀本部ロシア課長などを経て昭和20年4月阿南陸相秘書官。著に「太平洋戦争陸戦概史」

容易でなかつた天皇の放送

昭和15年11月10日、宮城前広場で海外からの招待客も含め4万9千人を集めて「紀元二千六百年記念式典」が盛大に開かれた。近衛文麿首相が、天皇の治世が長く栄えるように祝う「寿言」(よごと)を読み上げると、天皇が勅語を述べられ、東京音楽学校生徒が奉祝歌を齊唱し、近衛の「天皇陛下万歳」に全員が唱和した。同時に三宅坂の陸軍省裏庭の大砲と品川沖の軍艦から「皇礼砲」が轟き、全国のサイレンが鳴って式典を終わった。

この模様は、ラジオで全国に実況中継されたが、天皇の勅語の時だけは、放送は中断された。天皇は神であり、そのお声が機械を通して流れるのは畏れ多いというのだ。天皇の声である「玉音」を耳にしたのは参列者だけだった。

近衛 文麿(このえ・みまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。昭和12年6月首相となり、直後に始まった支那事変収拾に失敗。15年7月に第2次内閣で日独伊三国同盟締結。第3次内閣で日米交渉に努めたが、16年10月総辞職。戦後、戦犯に指名され自殺

▽下村の拝謁は 1時間を超えた

▽帰りの車の中で 川本秘書官に

「陛下は承知して下さった。私が陛下に『マイクの前にお立ち下さい』と申し上げると、『必要があればいつでもマイクの前に立つ』とおっしゃったんだよ」

▽下村は 目にうっすらと 涙を浮かべており

川本は「半泣きのような表情をしていたのが忘れられない」と いっている

●アメリカの原爆開発計画は昭和14年10月21日に始まった

▽ルーズベルト大統領の命令で

ウラニウムによる 原爆の可能性を検討する

大統領直属の「ウラン委員会」が 設置された

▽アメリカは 欧州戦争に 中立を宣言していたが

ナチス・ドイツの脅威は 放任できないものに

▽しかも ドイツで

原子核の研究が 進んでいることが

ルーズベルトを 動かすことになった

▽昭和13年秋 ウィルヘルム研究所の

驚異的な実験結果 核分裂による連鎖反応は

ユダヤ人のため ナチスの迫害を恐れて

ドイツを脱出した 女性科学者によって

デンマークの 世界的な物理学の権威

ニールス・ボア博士に 知らされた

▽ボアは 14年早々 ニューヨークを訪れ

プリンストン高等研究所で 科学者に話した

▽巨大なエネルギーが 放出されるということは

歴史の流れを 変えるような武器が

理論的に 製造可能になったことを 意味した

▽このような 強大な武器が

ヒットラーという 独裁者に握られることは

恐ろしいことだと 亡命科学者を 刺激した

ローレンス(カリフォルニア大学放射能研究所長)の言葉

「ウラニウム分裂の発見後、この分野のドイ

ツ研究の情報が入手できなくなってしまった。地下活

動と新しい亡命者によってもたらされてきた

断片的な情報から、ウィルヘルム研究所の一

大部門がウラニウムに関する強力な研究を開

… 昭和14年に第二次世界大戦 ……

世界中が、ヒットラー一人によって
引っ搔き回された年だった。日本に
対して、日独防共協定を強化して日
独伊三国同盟を結ぼうと提案してき
たのは1月6日。ところが、関東軍が満
蒙国境ノモンハンでソ連軍と戦って
いる最中の8月23日、協定の対象国で
あるソ連と突然独ソ不可侵条約を結
んでしまった。協定の際、秘密条項で
「相互の同意なく、ソ連との間に一
切の政治協定を結ばない」と取り決め
ていたから、これに違反する重大な
裏切りだった。

ヒットラーは、スターリンとの間に
ポーランド分割占領の密約をして、
西で英仏と戦争になつても東のソ連
の方は安全にしておいて、9月1日、ボ
ーランド進撃を開始した。英仏がド
イツに宣戦布告し第2次大戦に。

原子核の研究

ギリシア時代に提唱された原子「ア
トム」という考えは、近代になって再
び取り上げられ19世紀最後の10年間
に、X線や放射能を持つ新しい元素
の発見を通じて、「原子が物質の最終
単位」という考えは打ち破られた。20
世紀に入ってからは、イギリスの科
学者たちが原子核の人工転換に成功
すると共に、中性子を発見し、核反応
を起こすことにも成功していた。

昭和13年秋、ベルリンのカイゼル・
ウィルヘルム研究所で、2人の科学者
が実験の結果、ウラニウムを中性子
で破壊すれば巨大なエネルギーが放
出されることを確かめた。核分裂に
よって中性子が放出されると、放出
された中性子がさらに他のウランの
原子核に当たって核分裂を引き起
こし、放出される中性子が1個以上であ

始しており、約200人のドイツの最高の科学者たちが投入され、最高の優先権を与えられていることが明らかになった。ナチスは原子爆弾の計画に従事していたのである」

▽ 2人の亡命科学者

ジラード(ハンガリー)と フェルミ(イタリア)により
天然ウラニウムには

U₂₃₄ U₂₃₅ U₂₃₈ の 同位元素があり
その大部分は U₂₃₈で 核分裂は
天然ウラニウムには 極めて 少量しかない
U₂₃₅からのみ 起きること

核分裂の結果 2個の中性子が 放出されること

▽連鎖反応が 大爆発を起こす可能性

▽ジラードたちは 一刻も猶予できないと

AINSHULTAIN博士と相談
ドイツが 原爆を完成させる前に
アメリカで 原爆研究に 着手するよう
大統領に 進言することになった

▽10月11日 財界人アレクサンダー・サックスが AINSHULTAINの 大統領宛て手紙を持って ルーズベルトを 訪ねてきた

▽翌日 再び 訪ねてきたサックスに ルーズベルトは「アレックス、君が言いたいのは、我々がナチスに爆撃されてはならないということだろう」そして 秘書を呼ぶと 「この件は直ちに取り上げ対処すること」

● 17年6月18日、原爆製造の「マンハッタン計画」

▽遠く離れた 3か所の施設に 次々と 緊急資金

▽ニューメキシコ州 ロス・アラモスでは

実戦に使える 原爆の設計を
理論物理学者 オッペンハイマーの監督下で

▽テネシー州 オークリッジには

二つの谷間にまたがって 巨大な工場
同位元素ウランU₂₃₈と U₂₃₅を分離し
分裂しやすいU₂₃₅を 取り出す作業

▽ワシントン州東部の ハンフォードでは

ウラニウムから 化学的操作により
人工の元素プルトニウムを 分離する作業

れば、反応はネズミ算式に広がり、連鎖反応になるというのだ。

ニールス・ボア (Niels Bohr)

1885~1962 デンマークの物理学者。原子構造論を確立し量子力学の指導的役割を果たした。仁科芳雄博士も大正10年に留学した際、教えを受けている

AINSHULTAIN (Albert Einstein)

1879~1955 ドイツ生まれ。理論物理学者。1905年特殊相対性理論を発表、16年には一般相対性理論を完成、重力理論、宇宙論を展開した。33年、ナチスの迫害を逃れ米国に亡命。熱烈な平和主義者

… AINSHULTAINの手紙 …

8月2日付のこの手紙が、アメリカが原爆の研究開発に着手する契機となった。要旨は、①原爆の製造が可能であること②一発で周囲の地域を破壊できる公算が非常に大きいこと③アメリカはウラニウム含有量の少ない鉱石を若干所有するに過ぎず、カナダ、チエコスロバキアに若干の良質な鉱石があるが、最も重要なウラン産地は、ベルギー領コンゴであること。

そして「ウラニウムの原子が近い将来に、新しい重要なエネルギーになることが想像される。これによって生じる事態のあらゆる局面に十分注意すべきであり、政府は急速に手を打つべきである」としていた。

原爆計画を推進した亡命頭脳

「ドイツよりも早く」、このことだけに動機づけられたマンハッタン計画を推進したのが、ドイツ、イタリアなどの枢軸国から逃れアメリカに新天地を求めた亡命科学者で、多くはユダヤ人だった。ナチスの残虐さ、ドイ

●ドイツを目標に開発された原爆が、日本に対して使われることになったのは、なぜか？

▽ルーズベルトと 英首相チャーチルは

18年8月14日 ケベック(カナダ)で会談

原爆は「相互の同意なくして第三者に対して使用しない」と 決めただけ

▽19年9月1日からの 第二回ケベック会談では
「米英原子力協力に関する覚書」に 調印

「原爆が完成した暁には、慎重考慮の上、これを日本に対して使用するものとする」

▽アイゼンハワー将軍率いる連合軍は 6月6日
フランス大西洋岸 ノルマンディーに上陸
ドイツ軍を 大陸内部に 追い込んでいた

▽情報機関の報告でも 戦争が終わるまでに

ドイツが 原爆を完成させる懸念は なかった

▽使う相手は 日本しかなく

原爆使用の対象国として 日本が明記される

●9月末には、原爆投下の第509混成部隊を編成

▽ユタ州の砂漠地帯 秘密基地エンドーヴァーに
軍のあらゆる分野の 専門家を網羅した

1500名の将兵が 集められた

▽隊長には ヨーロッパ爆撃に当たった

29歳のチベツ大佐

●ルーズベルトは、原爆の実戦使用に疑問を？

▽9月22日 ブッシュ博士(科学調査開発部長)に

「完成したら本当に日戦に使用すべきか、それともテストした後は使用はせずに、一つの脅威として隠し持っていた方がいいのか？」

▽ブッシュは3日後 スティムソン陸軍長官に

「どうも自分の印象では、大統領は使わずにいて、戦後の平和維持のにらみとして置いておきたい意向のようだが、そんなことをしたら、ソ連もこっそり原爆を開発するだろう。そうすれば核戦争を招く心配がある」

▽科学者の間でも 議論が起きていた

ジラードは「原爆が完成した後も使わずに、戦後も秘密にしておく」ボーアは「国際管理し、原子力情報は自由に交流すべきだ」

ツ科学の優秀さを知り尽くしている彼らは、ドイツが先に原爆を手にすることを恐れ、全面的に協力した。

中性子の権威フェルミは、13年のノーベル物理学賞授賞式出席のためムッソリーニ政権下のイタリアを出国すると、ストックホルムからそのままアメリカに亡命した。17年12月2日シカゴ大学でプルトニウム生産には不可欠な原子炉の臨界に成功、人類が「原子の火」を手に入れ、暗中模索だったマンハッタン計画が実現へ向けて大きく踏み出した瞬間だった。

…… 奇妙な飛行訓練が続けられた ……

どのB29も、球根のような形をした大きな爆弾を積んで、いつも9千㍍以上の高度を飛ぶ。砂漠に白く描かれた直径150㍍の円形の目標を目がけ、爆弾手が目視により爆弾を投下すると、直ちに60度の角度で飛行機の方向を変え、156度2分の1の弧を描いて飛ぶ訓練を繰り返した。

原爆は、落としてから爆発までに43秒間。その間に13㍍以上飛行機が離れていないと、爆風、衝撃波で吹き飛ばされるため、その退避訓練だった。

20年春には2種類の爆弾完成

防諜上あだ名がつけられた。広島に投下されるウラニウム爆弾は、長さ3㍍5㌢、直径71㌢と細い形をしていることから、ルーズベルトを想定し「痩せっぽち」、最終的には長さが縮められ「チビ」、「リトル・ボーイ」と呼ばれるようになる。

長崎のプルトニウム爆弾の方は、長さ3㍍25㌢、直径が1㍍52㌢あり、チャーチル首相に見立てて「デブ」、「ファットマン」と呼んでいた。

- ▽スティムソンが ルーズベルトに
こうした意見を伝えたのは 20年3月15日
- ▽ルーズベルトは ヤルタ会談から帰国したばかり
体調がすぐれず ウォーム・スプリングスに
休養に 出かけようとしているところだった
- ▽ルーズベルトが 4月12日に急死
原爆を 日本に対して
使うべきかどうかの問題は トルーマンの手に

●原爆投下基地にはテニアン島

- ▽グアム島より 日本に 160キロ近く 4本の滑走路
- ▽4月末 第509混成飛行部隊は
15機のB29で 移動してきた
- ▽今後の原子力政策を どうするか
スティムソンを委員長に 8人の特別委員会
科学者ばかり 4人の顧問団が組織され
第一回合同会議は 5月8日に
- ▽スティムソン委員会は 6月1日
全員一致で 3か条の勧告を採択 大統領に報告

- 一、原爆は日本に対してできるだけ早く、これを使用すべきである
- 二、原爆は日本政府に最大の心理的衝撃を与え、無条件降伏を受諾すべきかどうか、最後の決定をさせるように、一大軍事施設に対してこれを使用すべきこと
- 三、原爆は予告なしにこれを使用すべきこと

▽スティムソンは 報告の中で

- 「日本の降伏を取り付けるためには、日本を粉砕するに足る破壊力を持っているという、証拠を見せる、とてつもない衝撃を加えることが必要だ、と考えた。その効果は、人命よりも何倍という米日両国の人命を救うことになるだろう」

- ▽この論理が アメリカの大義名分に

●目標選定委員会は選定基準として3点

- ▽①爆弾の威力を十分にあげるに足る大きさを持つこと②軍事的性質を持つこと③原爆の威力を確認するため、これまで爆撃被害のなかった都市

スティムソンは日記に

「二人とも、そのような破壊兵器を取り扱う責任の恐ろしさを知っていた。大統領は何べんも、この仕事をやれば(使用すればアメリカも)将来恐るべき惨禍を受けることになると思うが、しかし、いまは戦争中だから、と私に語った」

… 合同会議の議論は …

スティムソンは「原爆を軍事に使用する面だけでなく、この新しい力によって起こる全ての問題を考慮することにしたい」と挨拶したが、できるだけ早く戦争を終わらせるべきだ、という前提から会議は始まった。

沖縄ではまだ激戦が続いており、狂信的な特攻隊も不安材料であり、3回にわたった会議の議論は、日本に対して原爆を使うべきかどうかの問題に絞られていった。

科学者の間から、日本を含めた外国オブザーバーの面前で原爆のデモンストレーションをやつたらどうか、の意見が出たが、原爆が不発の場合、日本が代表派遣を拒否してきただうなるか。また、日本に原爆の威力を警告し、指定した期限内に降伏しない場合に限って日本に原爆を落としては、といった提案に対しては、日本が目標地帯に連合軍捕虜を送り込んで、「さあ、やれ」と挑戦してきただうなるか、との疑問が出た。

アメリカ統合幕僚会議は5月25日、九州上陸作戦を11月1日と予定し、作戦準備を指令していた。原爆製造の責任者グローブス少将は、「原爆ができたら、これを使うという以外に私は考えていなかった」と話している。

▽最初に 4都市が選ばれた

小倉 — 日本最大の軍需工場の一つがある
広島 — 軍隊の乗船港の一つ
新潟 — 日本海の重要な港の一つ
京都 — 日本の旧首都で人口百万

▽京都には スティムソンが反対

「日本の古都であり、日本人にとって宗教的な意味でも心のふるさとだ」

▽代わって長崎 目標リストは

最終的に 広島 小倉 新潟 長崎の順に

●政府部内や科学者から反対論

▽米首脳会議は 6月18日

日本本土上陸作戦の方針を 決定し

スティムソン委員会も 21日

「原爆の無警告使用」を 正式決定した

▽26日には サンフランシスコに

50か国代表が集まり 国連憲章に調印

▽ラルフ・バード海軍次官(8人の頸の一人)は 27日

ハリソン陸軍次官(五行の頸会議の頭)に

反対を表明し 7月1日 抗議して次官辞職

▽シカゴのフランク博士(ドイツのベル貴族)ら7人が
「無警告使用」に 反対の意見書

「無差別破壊の手段は、世界中の世論の支持を失い、軍拡競争を激化させ、原爆の管理に関する国際協定を阻害することになろう」

▽ジラード博士は

科学者67人の署名を集め 大統領に嘆願書

▽しかし 原爆開発は 最高の国家機密

こうした反対論が マスメディアに
取り上げられることは なかった

●7月中旬、広島型のウラン爆弾「チビ」が1個、長崎型のプルトニウム爆弾「デブ」が2個完成していた

▽ウラン爆弾は 理論的実験で

確実に 爆発することが わかつており

日本に投下前に テストの必要は なかった

▽問題は 天然ウラニウムに 微量の235を

分離抽出するのに 時間と金がかかり

爆弾の必要量を どれだけ 確保できるか

なぜ東京が外されたのか？

グローブスは「マーシャル参謀総長は、満州の関東軍と本土とを切る意味で、西海岸の港湾のある都市を無視してはならない」と私に忠告した。私は、東京も目標に定めていたが、スティムソン、グリー国務次官(元財政省)と話し合った結果、「皇居を最初に破壊することは愚かなことだ。天皇は、日本の象徴以上のもので、日本の再建にはなくてはならぬものだ」と警告された」

原爆投下部隊に対する指令

目標に必ず命中させるため、目視爆撃が重視され、好天を選んで実施すること、目視爆撃ができない場合は原爆搭載のまま帰投すること、時間的余裕がなく帰投できない場合にだけ、レーダー照準が認められた。同時に、これらの目標は、陸軍省の特別の承認なしに攻撃してはならないという指令が出された。

第21爆撃部隊司令官ルメイ少将は、原爆投下作戦は護衛機なしの単機で行なうことにした。日本は、高高度の単機飛行に対しては、偵察、天候観測と判断して特別な警戒をしなかったからだ、といっている。

… バード海軍次官の反対意見書 ……

「ポツダム会談が終った時点で、密使を派遣して中国沿岸のどこかで日本代表と会見し、ソ連がやろうとしていること(朝鮮の統一)、そして我々に原爆を使う計画があることを知らせる。その時、日本が降伏した場合の天皇と日本の処遇について、大統領の意のあるところを伝えれば、日本が探し求めている降伏のチャンスを与えることができる。このような手

▽プルトニウムは 天然には 存在しないが
天然ウランを使った 原子炉の運転により
人工的に いくらでも 量産できる

▽問題は 連鎖反応 ネズミ算的な力が
ウラニウム235が 1が2.5になるのに
プルトニウムは 1が1.8ぐらいにしか増えず
爆発の実験を やってみる必要があった

▽7月16日午前5時半
ニューメキシコ州 アラモゴードの砂漠で
豪雨が降り注ぎ 稲妻が閃く中 爆発実験

▽爆発は 天を焦がし
轟音は 190キロ離れた町でも 聞こえた

▽機密保持のため
翌日の新聞には 小さく「弾薬庫が爆発」

●トルーマンは25日、原爆投下命令を承認

▽戦略空軍司令官 スパーツ中将に対し

「①8月3日頃以降、天候の許す限り速やかに次の目標の一つに最初の特殊爆弾を投下せよ。目標、広島、小倉、新潟及び長崎②特殊爆弾計画者の準備がすみ次第、上記目標に対する新たな爆弾が交付される。このリスト以外の目標は別な訓令をもって示す ③日本に対するこの武器の使用法についての情報は、陸軍長官と大統領の許可がない限り、口外することを禁ずる」

▽スパーツは 原爆投下の日時決定を
ルメイ少将に 一任した

▽ルメイは 8月2日 原爆作戦の実施命令

◆攻撃日は6日
◆新潟が遠過ぎるという理由で攻撃目標から外され、小倉、長崎は近くに捕虜収容所があることから、広島を第一目標とし、小倉が第二、長崎は第三目標に

●6日午前1時37分、天候観測の3機のB29発進

▽30分後に「エノラ・ゲイ」が
黒く塗られた ウラン原爆「チビ」を積んで
両脇のB29には 爆発測定班 カメラ班

段をとって失敗しても、我々は失うものはないし、成功すれば得るところが大である。唯一の道は試みることである。これは、人道主義の国であるアメリカの立場と、アメリカ国民のフェアプレーの精神に發するものである」

もともと海軍は「封鎖と空爆で日本を降伏させることが出来、本土上陸作戦は不要」の見解だったから、フォレスター海軍長官も承知しての反対だったと見られる。

原爆の部品、テニアンへ

グローブス少将は実験成功の16日、重巡洋艦インディアナポリスに爆弾用ウラニウム235の主要部分を積み、サンフランシスコから出航させた。インディアナポリスは26日テニアン島に到着し、荷揚げのあとフィリピンに向かう途中、30日に伊号58潜水艦の攻撃を受け、乗員900名もろとも沈没した。

攻撃がテニアン到着前だったら、原爆は3個のうち1個を実験で使っていたから、残る原爆は1個しかなかったわけで、少なくとも長崎の運命は変わっていたろう。

「エノラ・ゲイ」

最初の原爆投下機となるB29は、チベツ大佐の母親の名前をとり「エノラ・ゲイ」と命名された。医者になるため大学で勉強していたチベツがパイロットになろうと決心を変えた時、家族みんなが反対した中で「おやんなさい」といってくれたのは、母親だけだったからだという。

▽天候観測機が 日本に到達したとき

目の届くかぎり 密雲におおわれていたが
7時9分 広島郊外に来ると 広島上空だけ
ポッカリ 直径20キロほどの穴 「雲量、全高度
を通じ三以下。意見具申、第一目標攻撃可」

▽「エノラ・ゲイ」は 一路 広島に進路をとり

午前8時15分の 原爆投下に

● 9日以降日本は、5日間にわたり不安定な天候予想

▽グローブス少将は「アメリカがこの新兵器を量産
していて、日本人に繰り返し原爆攻撃の恐怖を知
らせるためにも、第一の爆撃に続いて出来るだけ
早く、第二の爆撃を行なうべきだ」と 主張

▽トルーマンは ポツダムからの帰途

大西洋上の 巡洋艦オーガスタで
「原爆投下成功」の電報を 受け取ると
第二の原爆投下を 命じた

● 9日午前11時2分、長崎にプルトニウム型原爆「デ
ブ」がレーダー操作により投下された

▽爆心から720㍍離れた 浦上天守堂には

聖母昇天の祝日の 準備のため
大勢の信徒が 集まっていたが
その頭上に 崩れた屋根や石壁が 落ちた

▽爆心北側の 長崎刑務所でも

看守と囚人118人 全員が死亡

▽市街地は全滅したが その範囲は 広島より小さく
火災嵐も 起きなかった

▽海に向かって解放された 盆地の地形で

被害が 山地によって 局限されたという

▽しかし 正午を過ぎた頃 浦上地区に「黒い雨」

▽この時 原爆と一緒に 落下傘で投下された

ラジオゾンデ(気象観測器)に

東大教授 嵯峨根遼吉に宛てた手紙

▽嵯峨根が カリフォルニア大放射能研究所で
研究したとき(昭和10~13年) 一緒に仕事した

3人の科学者が テニアン島に来ていた

▽「嵯峨根なら、広島で何が起こったか、

日本の政府首脳に説明できるだろう」と
降伏勧告の助力要請に ペンをとった

9日的小倉は天候不良が幸い

第一目標は小倉だったが、天候観測機の報告では、小倉、長崎とともに雲量10分の2。原爆投下機は小倉に向かつたが、街路や建物が見えるのに、最大の目標である工場地帯は煙とモヤのためハッキリ見えない。「肉眼で確認できなければ投下中止」を命令されており、長崎に向かうことになった。

長崎では朝、空襲警報が発令されたが、午前8時30分、1機のB29が通り過ぎただけ。警戒警報に切り替えると、また爆音が聞こえてきて西部軍管区司令部は10時53分、「原爆搭載機の恐れあり」と判断し、再び空襲警報を発令した。ラジオや通信機関を利用し、繰り返し「B29少数機、長崎方面に侵入しつつあり。全員退避せよ」と連絡したが、市民には一番肝心な「特殊爆弾投下の疑い」には触れなかった。

原爆投下機が長崎に近づくにつれ、雲が増え始め雲量10分の9。市内はほとんど雲におおわれようとしていたが、原爆を沖縄へ持ち帰ることは、その重量のため燃料消費量が増えて海上に不時着の恐れがあった。結局、レーダー照準により投下された。

嵯峨根 遼吉(さがね・りょうきち)

明治38(1905)~昭和44(1969) 東京生まれ。核物理学者。文化勲章受章の長岡半太郎大阪帝大初代総長の五男。理研、カリフォルニア大を経て昭和18年東大教授。サイクロotron利用の核物理実験を行う。41年日本原子力発電副社長

嵯峨根教授宛ての手紙

貴兄のアメリカ滞在中の科学的研究の
同僚三人より

「我々がこの個人的メッセージを貴兄
にお送りする理由はほかでもあります

●原爆投下は、本当に必要なことだったのか？

△米首脳は 日本の国力 戦力が

もう 限界にきていることを 知っていた

△東郷外相と 佐藤尚武駐ソ大使との間の

24通の外交電報 解読で

日本が 終戦への機会を 模索し

ソ連に 韓旋依頼していることも 掘んでいた

△連合軍総司令官 アイゼンハワー元帥は

7月20日 トルーマンから 意見を求められ

「日本はもはや敗北同様の状況にある」と 指摘

これに 追い打ちをかけるよう

原爆投下には 明確に 反対し

「これほど恐るべき威力を持つ新兵器を、アメリ

カは最初に使用する国になってはならない」

●「死者百万」の弁明論には無理がある

△トルーマンは「原爆は一つの兵器であり、

それを使うことに疑いを持ったことはない」

△チャーチルも「米国人百万人とその半分の英国人

の生命を救った」

△アメリカ側は 一貫して

「原爆投下は、日本に無条件降伏を強制し、戦争を終結させることによって多くの人命が救えることになったから、止むを得ないこととしてやったのだ」

△太平洋戦争中の 米軍戦死者は 全部で29万人

しかも 11月の九州上陸作戦まで

大規模作戦の 計画はなかった

△広島 長崎と

人口集中の都市ばかりを 選んだのは なぜか？

△B29には 日本の文化財への

爆撃制限リストが 配されていた

城郭では 北の弘前城から 南の熊本城まで

特に 仏教文化と 美術の粹を集め

京都 奈良の社寺仏閣には 十分な配慮が

△日本人の 生命の価値は

「文化財以下」と いうことだったのか

●ポツダム宣言発表は7月26日夜、日本が受諾するかどうか、待つ時間的余裕はいくらでもあった

ん。それは、優れた原子物理学者としての貴兄が、大本営に対して、もしこの戦争を継続するなら日本国民の蒙る被害が恐るべきものになることを、貴兄から是非説得してもらいたいからなのです。…

三週間のうちに、我々は一発をアメリカの砂漠で、第二発を広島で、そして今朝第三発を爆発させているわけです。このような事実を、日本の指導者たちに貴兄から明確に伝えられ、もしこの戦争が継続すれば日本の全ての都市が死滅してしまうという恐るべき人命の喪失を、貴兄の全力を挙げて押し止められるよう努力されることを懇願します。科学者として我々は、見事な科学上の発見が、このような用途に利用されることを悲します。しかし、日本が直ちに降伏しない限り、原子爆弾はその威力を倍加することでしょう」

佐藤 尚武(さとう・なおひで)

明治15(1882)～昭和46(1969)大阪生まれ。駐仏大使を経て、昭和12年林内閣外相。17年駐ソ大使。戦後22年に参議院議員に当選。24年から4年間参議院議長

アイゼンハワー(Dwight Eisenhower)

1890～1969 第2次大戦中、連合軍総司令官として対独戦を指揮。戦後、1953年に第34代大統領に就任し、2期務める

日本の原爆研究

アメリカと大差なく、昭和15年4月、陸軍航空技術研究所長の安田武雄中将(のち航空監査官本部長)が、部下に「原子爆弾の可能性について調査してみろ」と命じたのが始まり。安田は「日本は小さな国だ。いくら飛行機を作つてみたって、アメリカには及ばない。相手と同じようなことをやってもダメ

- ▽原爆投下命令は もう その前に
　　トルーマンが 急いだ理由は 何か？
- ▽ソ連を にらんでのことだった
- ▽ポツダム会談が 始まるまでは
　　トルーマンの狙いは ソ連参戦を急がせること
- ▽原爆実験の成功で ソ連参戦は 不要になった
　　ソ連参戦前に 日本に 手を上げさせたい
- ▽すでに 始まりつつある米ソ冷戦に
　　アメリカが ソ連に対して 力を誇示し
　　戦後世界政治の主導権を 確保することに

●原爆投下には、直後から国際社会の批判

- ▽ロイター AP通信は
　　「ローマ法王庁が原爆投下に遺憾の意を表明」
- ▽ワシントン・ポストも「科学者の宣言」として
　　「被爆地は七十年間、死の世界と化す」
- … 日本のスイス公使は外務省に報告 ……
　　「スイス紙は8日『連合国側は新爆弾の人道的
　　なる所以を説かんとし、これにより将来戦争
　　は起こり得ざるべしと言ひ居るも、米国論の
　　一部にさえ、米英による右製造の独占は結局、
　　一時的なものたらざるを得ずとし居れり』と
　　指摘、英仏の新聞も『新爆弾が一強国により独
　　占せらるる場合には帝国主義的征服の一手段
　　と化す』と懸念を表明している」

●原爆を実戦に使ったことは、戦後世界に大きな影響

- ▽たった1発の 原爆被害が 悲惨なこと
　　被爆者の後遺症は 60年以上経った 今もなお
- ▽東西陣営の対立により 核攻撃に対する恐怖
　　核軍拡競争を もたらしたし
　　どの国も 嚴重な 領空侵犯処置をとるようにな
　　軍用機や 民間機の 撃墜事件が多発
- ▽「どうやって国際管理するか」も 未解決のまま

だ。戦争に勝つためには、原爆のような特殊兵器が必要だった」と話している。

安田は16年4月「可能性あり」の報告で、理化学研究所に正式に「原爆製造に関する研究」を依頼、主任研究員仁科芳雄博士が担当者となり、仁科の頭文字からとった「二号研究」がスタートした。

しかし、陸軍が理研に提供した予算は約200万円。朝鮮半島や福島県石川町で行なわれたウラン資源探索などの費用を含めても2千万円ほどで、マンハッタン計画の千分の一程度に過ぎなかった。

20年4月13日、空襲で理研が焼失、陸軍も目先の本土決戦準備に追わられて「二号研究」は中止の形になったが、日本の国力で原爆を製造することなど、夢物語だった。

仁科は、アメリカに及ばなかった根本原因として①研究に従事する科学者が少数のものに限られていた②経費が制限されて大規模な実験ができなかった③学理の結論を実際に具体化する工業力がなかった。この3点を挙げているが、「たとえ以上のことが解決されても、日本にはウランの原料がなかった」といっている。

「広島、長崎への原爆投下」関係年表

聯11	1936	11. 26 広田弘毅内閣、日独防共協定調印	聯20	1945	6. 8 御前会議、「戦争指導の基本大綱」(飽く迄戦争完遂)決定
12	1937	7. 7 盧溝橋事件勃発。支那事変始まる			6. 18 米首脳会議、日本本土上陸作戦決定
13	1938	勅 独カイゼル・ヴィルヘルム研究所で2人の科学者が核分裂の連鎖反応確認			6. 21 スティムソン委、日本に対する「原爆の無警告使用」を正式決定
14	1939	1. 6 独、日本に日独伊三国同盟を提案			6. 22 最高会議構成員の御前会議。天皇、終戦につき「速やかに研究し実現を」
		5. 11 满蒙国境でノモンハン事件起る			6. 23 沖縄の日本軍、組織的抵抗終わる
		8. 23 独ソ不可侵条約調印。独、ソ連との間にポーランド分割占領の密約			6. 26 世界50か国代表、国連憲章に調印
		9. 1 独軍、ポーランドに進撃を開始し第2次世界大戦始まる			6. 27 バード海軍次官、原爆の無警告投下に反対を表明(7. 1 抗議の辞職)
		10. 21 大統領直属の機関「ウラン委員会」を設置、米の原爆開発計画始まる			7. 16 米、プルトニウム型原爆の実験成功◆重巡インディアナポリス、ウラン235を搭載しサンフランシスコ出航
15	1940	4. - 陸軍航空技術研究所長の安田武雄中将、原爆の可能性について調査指示			7. 17 米英ソ三国首脳、ポツダム会談開く
		9. 27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印			7. 20 アイゼンハワー元帥はトルーマンに見解を求められ、「米国が原爆を最初に使う国になつてはならぬ」と反対
16	1941	11. 10 宮城前広場で「紀元2600年記念式典」			7. 24 トルーマン、戦略空軍司令官に対する「8月3日以降」の原爆投下命令
		4. 13 日ソ中立条約調印(有効期21年4月)			7. 26 米英中首脳連名の「ポツダム宣言」発表◆インディアナポリス、テニアン着
		4. - 安田中将、理化学研究所に「原爆製造の研究」を依頼。仁科芳雄博士が担当者となり「二号研究」スタート			7. 27 外務省は午前7時、サンフランシスコ放送で宣言傍受◆最高会議の6首脳会議と閣議、「しばらくソ連の出方を見て、宣言は黙過」の方針を決定
		6. 22 独軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる			7. 28 鈴木首相、午後4時の内閣記者団会見で「宣言黙殺と戦争邁進」を言明
		10. 18 東条英機内閣発足。東条は陸相兼任			7. 30 伊号58潜水艦、フィリピンに向かう途中のインディアナポリスを撃沈
17	1942	12. 8 太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃			8. 2 ポツダム会談終る◆ルメイ少将、原爆投下作戦の実施命令。攻撃日は6日で、広島を第一目標とし、新潟は外され、小倉第二、長崎第三目標
		6. 5 ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失			8. 6 広島にウラン型原爆を投下
		6. 18 「マンハッタン計画」で原爆製造へ			1:37 天候観測の3機、テニアン発進
		8. 7 米軍、ガダルカナルに上陸開始			2:07 原爆搭載の「エノラ・ゲイ」発進
18	1943	12. 2 シカゴ大学で原子炉の臨界に成功			7:09 中国軍管区司令部「豊後水道を大型機3機北上中」に警戒警報◆米観測機「広島攻撃可」と打電
		8. 14 ルーズベルト、英首相チャーチルとケベックで会談。原爆は「相互の同意なくして第三者に使用しない」			7:31 B29、播磨灘方面に去り警報解除
19	1944	6. 6 連合軍、仏ノルマンディーに上陸			8:06 広島東方監視哨、西進中のB29発見
		6. 15 米軍、サイパン島に上陸(7月7日陥落)			8:11 軍管区受信、空襲警報間に合わず
		7. 18 東条内閣総辞職			8:15 原爆投下、高度580mで爆発
		7. 22 小磯国昭・米内光政連立内閣成立			夕刻 大本営、有末精三中将を団長に仁科芳雄博士ら8人の調査団派遣を決定
		9. 1 第2回ケベック会談で「原爆が完成した暁には日本に対して使用する」			8. 7 トルーマン、声明で「原爆」と明言◆内閣に「原爆対策委員会」設置◆大本営、午後3時半「新型爆弾」と発表
		9. 未 ユタ州エンドーヴァー基地に原爆の投下部隊として第509混成部隊編成			8. 8 東郷外相、原爆につき上奏。天皇、「速やかに戦争終結の努力を」◆下村宏情報局総裁参内、天皇は玉音放送了承◆内務省は各都道府県に新型爆弾の防御法を指示◆ソ連、日本に宣戦布告
		10. 20 米軍、レイテ島に上陸			8. 9 ソ連軍、満州、朝鮮、樺太で侵攻開始◆午前11時2分、長崎にプルトニウム型原爆投下◆午後11時50分、御前会議
		10. 25 神風特別攻撃隊、レイテ沖に出撃			8. 10 政府、スイスを通じ米に抗議文◆広島爆撃調査団、「原子爆弾なりと認む」
20	1945	11. 1 サイパン発進のB29、東京を初偵察			8. 15 正午、終戦の玉音放送
		11. 24 B29、中島飛行機など東京を初空襲			4. 26 ソ連チェルノブイリ原発で爆発事故
		1. 9 米軍、ルソン島リンガエン湾に上陸			5. 15 厚生省、原爆死没者を広島201,990、長崎93,966人と発表
		2. 4 米英ソ三国首脳、ヤルタで会談			
		2. 19 米軍、硫黄島上陸(3月17日正午)			
		4. 1 米軍、沖縄本島に上陸			
		4. 5 小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎に大命◆ソ連、日ソ中立条約不延長を通告			
		4. 7 鈴木内閣成立。陸相に阿南惟幾、海相に米内◆戦艦大和、沖縄特攻で沈没			
		4. 9 外相・大東亜相に東郷茂徳元外相			
		4. 12 米大統領ルーズベルト死去。第33代大統領に副大統領トルーマン			
		4. 13 空襲で理研焼失。「二号研究」中絶			
		5. 2 原爆投下の目標選定委員会発足。(小倉、広島、新潟、京都の4都市だったが最終的には京都が外され長崎に)			
		5. 7 ドイツ、連合軍に無条件降伏			
		5. 8 米、原子力政策の第1回合同会議			
		5. 25 米統合幕僚会議、九州上陸を11月1日と予定し、作戦準備を発令			
		6. 1 米スティムソン委員会、大統領に「日本に予告なしの原爆投下」を勧告			